2018.7 no.80

aaca

一般社団法人 日本建築美術工芸協会

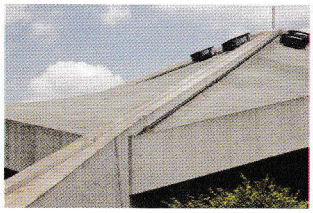
設立30周年

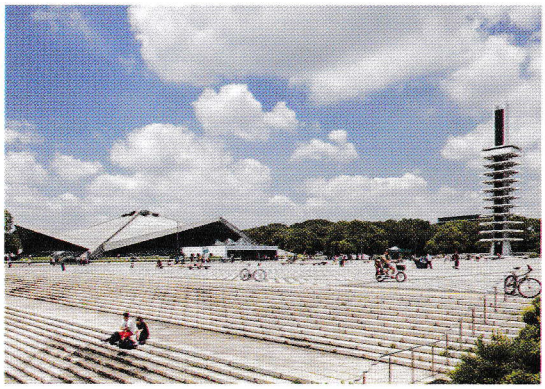
駒沢公園体育館・管制塔　1964 年（撮影　新建築社写真部）

表紙解説

東京オリンピック駒沢公園体育館・管制塔

（設計：芦原義信、1964年竣工）



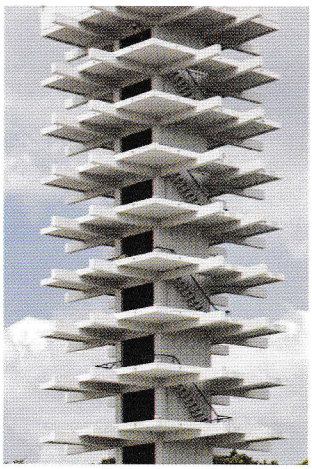


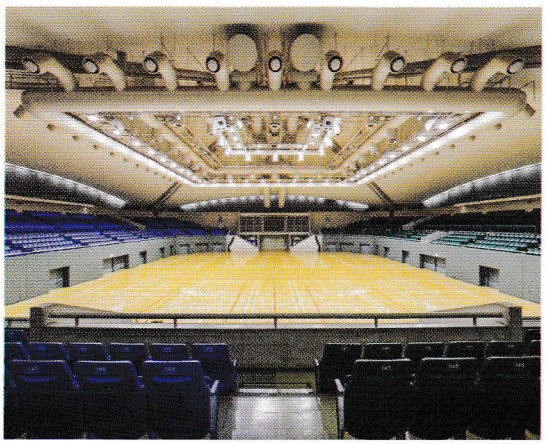
●建物の前に広がる約2万平方メートルの広場は、大通りからの大階段をのぼる運動とともに、期待する気持ちにしたがって展開する眺め（＝シークエンス）が身体感覚と呼応して、雄大でありながらかつヒューマンスケールな心地良さを感じさせる空間である。床には旧都電の古い敷石が使われている。

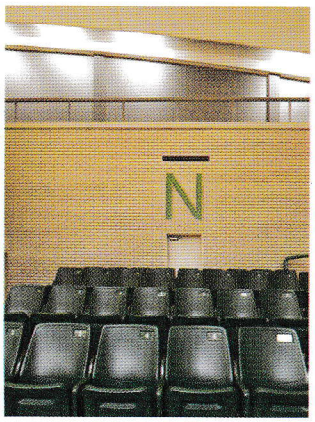
体育館の屋根を支える曲面シェル構造はモダニズムを象徴する形状である。近代的な機能の追及の結果としての形の中に、日本の古建築の屋根のそりの美しさが見て取れる。

オリンピック記念塔の管制塔～通称「鳥の巣」～は、SRC造地上8階地下2階建。正面十一の層からなるコンクリート製の梁と床版は、シンボリックかつ日本的な造形美を体現している。「都市」と「建築」、「空間」と「人間」、「動」と「静」…。あまたある諸要因への解が建築の形態である中で、2つの対極を常にエレガントに融合させる。これこそが芦原義信の求めた美学なのであろう。

（三上紀子）







撮影：吉田 誠

芦原義信　（1918-2003）建築家、工学博士、東京大学名誉教授、日本芸術院会員、aaca設立者

東京大学工学部建築学科卒業後、ハーバード大学大学院で修士号（M.Arch.）取得。昭和31年、芦原義信建築設計研究所（後に芦原建築設計研究所と改称）を設立。建築設計の傍ら、法政大学教授、武蔵野美術大学教授、東京大学教授を歴任。日本建築家協会会長、日本建築学会会長を務める。建築作品は、東京オリンピック駒沢公園体育館・管制塔(1964)、銀座ソニービル(1966)、モントリオール万国博覧会日本館(1967)、国立歴史民俗博物館(1972)、東京芸術劇場(1990)など多数。著書に『街並みの美学』（毎日出版文化賞）、『隠れた秩序ー二十一世紀の都市に向ってー』等。
勲二等瑞宝章受章、文化勲章受章など数々の賞を受ける。

CONTENTS

■芦原義信生誕 100 年を迎えて
正統なモダニズムの継承者　芦原義信（1）　飯田郷介　4

■会報 80 号に寄せて
岡本賢会長におききする　広報委員会　6
今は懐かしい思い出に・・・　高部多恵子　8

■時代の華一輪
建築と美術工芸の融合とその公共調達システムの改善　仙田　満　10

■会員活動レポート
彫刻ワークショップを通じた交流　堤　一彦　12
バスケタリーの造形から見えるもの　神　芳子　13
インドネシアでの文化交流を通じて　ノグチ ミエコ　14
人と物と場について考えながら　岡本直枝　15

■平成 29 年度　AACA 賞
[AACA賞 優秀賞]　一華寺　無尽塔　宮森洋一郎　16
[AACA賞 特別賞]　洗足池の家 /MONOLITH　城戸崎博孝　17
[AACA賞 奨励賞]　特別養護老人ホーム 成仁ハウス 百年の家　内藤将俊　18
AACA 賞受賞者紹介のつどい　第 1 回・第 2 回開催報告　可児才介　19

■委員会活動報告
フォーラム委員会
第 192 回 aaca フォーラム開催報告
現在のアートをめぐるいくつかの問い
～アートキュレーションの視点から～　津野恵美子　20

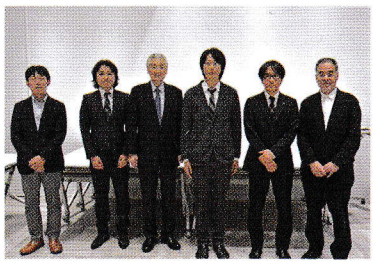
広報委員会
伊東豊雄設計作品見学、東京工科大学訪問報告　21

総務委員会
平成 30 年度通常総会　22

■事務局だより　24

▶▶ 6

▶▶ 14


▶▶ 19

▶▶ 20

▶▶ 21

芦原義信生誕100年を迎えて

正統なモダニズムの継承者　芦原義信（1）

広報委員会委員長　飯田郷介

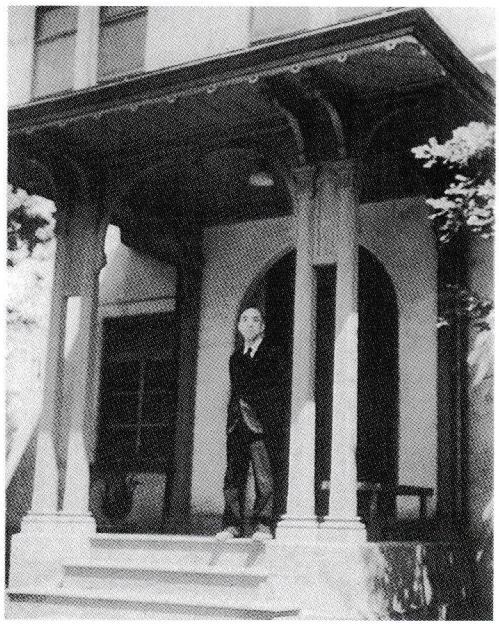
日本建築美術工芸協会を創設された芦原義信先生は、今年生誕100年を迎えられます。この生誕100年を記念して芦原義信先生のお人柄や輝かしいご業績あるいはほほえましいエピソードなどを拙著「美味しい美術館Ⅱ」から抜粋し、4回に分けてご紹介いたします。

華麗なる一族（前編）

芦原義信先生（以下敬称略）は、“正統なモダニズムの継承者”と言われ、建築単体から都市空間・景観・街並みにいち早く着目した建築家である。芦原義信は、大正7年（1918）7月7日、現在の東京都新宿区若葉町1丁目にある西念寺あたりで八人兄弟の末っ子として生まれ育った。

父信之は明治元年、丹後で十代も続いた医師岡山友仙の次男として生まれた。祖父岡山友仙夫婦は美男美女で、父の信之も美男だったそうである。母喜久も医者の家の出で、祖父嗣章は森鴎外に5年遅れて私学出身で初めて軍医総監になった。母方の曽祖父小栗信は幕末の傑物小栗上野介分家の旧幕臣で明治政府になってから陸軍省御用掛をしていた。また母の弟には憲法学者の藤田嗣雄、画家の藤田嗣治がいた。

父親の信之は姉が嫁いだ、西南の役で後の乃木将軍の命の恩人といわれ、乃木将軍の副官を務めた軍人蘆原甫家の養子となり蘆原姓となった。信之は、日清・日露の両戦役では軍医として従軍した。そして日清戦争の論功行賞で金鵄勲章の功五級をもらい、一時金二千円を受け、これを元にドイツに私費留学し、約3年弱勉強してドクトル・メヂチーネの学位を得た。早くから医者を開業したいと思っていた信之は、「もし開業するなら一等軍医正でやめておかなければ、軍医監（少将）になっては、もう開業出来ないからね」[*1]と一等軍医正（後の軍医大佐）で軍をやめた。そして大正4年（1915）12月、四谷区南伊賀町16番地（現在の新宿区若葉1丁目11の3）に蘆原医院を開いた。蘆原家の門の脇の看板には「皮膚科、泌尿科、一般外科」として診察時間などを左側に2行書き、上部にはローマ字で「ドクトル・エヌ・アシハラ」と白文字で書いてあり、門柱には「ドクトル・メヂチーネ・蘆原信之」という白い陶器の表札と、その下に「蘆原医院」という表札がかけてあったという。133坪の敷地には、表のほうに洋館が、奥に日本家屋が建てられ、その間に中庭があり、両建物は廊下でつながれていた。日本家屋は住居として使われ、洋館は2階建てで医院として使用され、1階が待合室と薬局、2階が診察室と特別待合室、廊下に電話室と便所があった。自宅が医院であったため、夜中に急患で起こされたり、夏なども重症の患者を抱えていると家を離れることができなかった。こうした父親を見ていた兄弟は、父親の強い勧めがあったにもかかわらず兄弟中一人も医者にならなかった。また姉たちも医者に嫁したものはなく、代々続いた医者の家系も絶えてしまった。「蘆原医院」のあったところには今はマンションが建っている。



蘆原医院の入口に立つ蘆原信之　（写真提供：芦原太郎）

芦原義信が生まれ育った西念寺付近（道路の突き当たりに蘆原医院が開業していた）

芦原義信の次兄蘆原英了（本名：敏信）は、「私のところは兄弟姉妹みんな仲がよかったのみならず、みんな秀才で番町小学校では評判であった。長兄は病身であったが、次兄は岡山の中学から編入試験で、東京府立四中の二年生に入ったし、三兄は番町小学校からやはり同じ府立四中に入ったし、私だけが四中をすべって開成中学に入ったが、同じ番町小学校を卒業した三人の妹は、上の二人は府立第五高女に、下の一人は雙葉高女に入ったし、最後の弟は府立一中に入った。このうち最後まで秀才を保ったのは、末弟だけで、あとは年と共に秀才でなくなった」[*1]と末弟義信だけが秀才だったと語っているが、英了の著書『僕の二人のおじさん、藤田嗣治と小山内薫』からは蘆原家の華麗なる一族の部分を垣間見ることができる。

芦原義信は番町小学校に入り、学校へは毎日四谷見附橋を渡って歩いて通っていたという。中学（旧制）は府立一中（現・都立日比谷高校）へ入り、そして昭和15年（1940）、東京帝国大学に入学した。進学について芦原義信は、「一つは、働くときはうんとはたらくけれど、一段落したらなにかグッと休みたい、毎日同じように銀行へいって、お金の計算するなんていうのは非常に厭でありまして、やるときは大いにやるけれど、休むときは大いに休むというような職業はないか」[*2]そして「母の従兄弟は小山内薫だったり弟に絵かきがいたり、また私の兄の英了がいたり、そういうこともあって芸術と科学との間ぐらいのところと考えたのです」[*3]と東京帝国大学工学部建築学科に入学した。母方の祖父藤田嗣章の姉錞は陸軍軍医小山内建の妻となり、その長男が明治末から大正・昭和初期に活躍した劇作家・演出家小山内薫であり、絵かきとは藤田嗣治のことで、嗣治は母喜久の弟である。

そのころの東京帝国大学工学部建築学科には、主任が武藤清、建築計画に岸田日出刀、建築構造に内田祥三、都市計画に高山英華、建築史に藤島亥治郎がいた。学科は全部で40人ほどで、同級生には学校に残って教授になった池辺陽、田中一彦、国鉄（現・JR）に入った佐野正一、清水建設の社長になった吉野照蔵らがいた。しかし入学した頃にはすでに戦争の足音が段々と近づき、大学三年生になると雲行きがあやしくなり、繰り上げ卒業となった。卒業論文は「塑性領域におけるラーメンの研究」というテーマで、指導教官は武藤清であった。この論文はやがて超高層建築の理論に繋がっていくのである。当時の国鉄に行きたかった芦原義信の卒業設計は「駅」であった。「このパースを叔父の藤田嗣治にちょっと手伝ってもらったところ、画龍点睛をほどこしたような具合で出来栄えがぐんと上がり、これには驚きました」[*4]というエピソードも残っている。

昭和17年（1942）9月、大学を繰り上げ卒業すると、この年から海軍にできた建築の技術士官として入隊した。青島（チンタオ）で訓練を受け、設営隊中隊長として二隻の船団でニューギニアへ向う途中、フィリピン沖で一隻が潜水艦の魚雷攻撃を受け撃沈した。半分油だらけの人員を拾い上げて、芦原義信は無事ニューギニアに着いた。ニューギニアでは早速、飛行場建設に取りかかった。ところが、日本の飛行機が一機も飛来しないうちに米軍のグラマンの攻撃を受け、飛行場は使い物にならなくなり、アンボン島に転進となった。ここを引き上げる間際に、「せっかくつくった飛行場を何にも使わないのは残念だというので、軍医で塚原君というのがいて、ふたりでテニスの球とラケットを持って、危ないから1回か2回打ち合って、それで帰ったんです」と危機迫る中でも茶目っ気ぶりを発揮している。

そして輸送指揮官として「君は少なくとも大学を出たんだから、なにかできるであろう」と言われ「『ニューギニアからアンボンへ、間のところに島がある。その島あたりで、何時何分にちょうど月が沈むから、それに間に合うようにスースースーと3,000人の隊員を乗せて行かなければならない。船が、こっそり夜陰に乗じて入って来るから、一人何秒かでこの巡洋艦に乗せる。』初めてやったことのないことをとにかく考えて、まあ度胸があったというんでしょうか、とにかくその3,000人と機材を乗せて、輸送指揮官の任務を果たしました」[*2]と無事任務を果たした。

そして巡り巡って鹿児島に着き、飛行基地の建設に携わり、それから霞ヶ浦に、そして終戦を木更津で迎えた。四谷の実家にもどると、四谷の家はおろか、ほとんどが灰燼に帰していた。芦原義信は「今度こそは建築家として、命のつづくかぎり、この焼け野原を素晴らしい都市空間にしなければならない。身震いする思いで焼け野原を歩き回った」[*4]と決意を新にした。

出典
＊1『僕の二人のおじさん　藤田嗣治と小山内薫』蘆原英了著　新宿書房
＊2『建築空間の魅力　私の体験』芦原義信著　彰国社
＊3『日本現代建築家シリーズ⑥芦原義信』新建築社
＊4『建築家の履歴書』芦原義信著　岩波出版

会報80号に寄せて

岡本賢会長におききする

広報委員会インタビュー

aaca会長　岡本　賢氏

— aaca 30周年について

平成30年が協会の30周年で、平成も終わりという記念すべき年ですね。まあ実際は30年以上前から協会の前身がありますからトータルでは40年になります。

芦原先生が文化庁にお願いして協会を設立されたのが30年前。伝統の長い会です。

私自身はそう古くないんです。15年ほどです。

久米設計の桜井（当時社長）が芦原先生とお付き合いがあり、長いこと協会に参加しておりました。それを私が引き継いで協会に参加したわけです。ですから協会の古い時代の話はあまり知らないんです。

芦原先生はカラオケがお好き、飲み会がお好き、麻雀もお好き、でいろんなところでいろんな方々とお付き合いしていらっしゃったようですが、私はほとんどお付き合いがありませんでした。

銀座ロータリーに芦原先生がいらして、私も誘われて銀座ロータリーに入りました。

あの会でもカラオケの会とかいろんな会があったのですが、そこでもあまりお付き合いはなく公式な場でお会いする程度でしたから協会で芦原先生と何かご一緒するということもなかったので、その意味では協会にあまり貢献していません。（笑）

—協会活動について

私が協会理事になり何かしなければいけないという時に協会が20周年を迎える時期だったので私が20周年の実行委員長をやることになりました。

当時は景観シンポジウムを大々的に行っていました。地方でも開催していました。

私が参加したのは仙田先生が景観シンポジウム委員長をやられていた横浜の時です。

たまたま久米設計の横浜支社の上階がシンポジウム会場だったので、私がお手伝いすることになりました。

景観シンポジウムはそれまで年1回開催でしたが20周年を機にもう少し大々的にやろうということになって年2回行うようにしました。それといろんな講演会やフォーラムなどを頻繁に行うことにしたのですが、それは参加費で収益をあげようという目的もあったからです。参加者が一番多かったのは東京ガスホールで開催した時で300人くらいだったと思います。

当時は景観シンポジウムを地方でも開催していました。これは文化庁関連で、文化庁から地方で何か企画できないかという要請があったので、協会のいろんな人脈を通じて各地方で開催してはどうか、ということで地方開催を行ったと聞いています。ただ地方の場合は集客が難しかったらしいです。東京から会員が相当出向いて行ったようです。

私は20周年の実行委員長でしたが20周年として何か特別なことはなく、現在協会で行われているようなもの以外に新しいことをやった記憶はないですね。

景観シンポジウムメインに講演会や見学会を行っていましたね。

今、景観シンポジウムやフォーラムの参加者集めが難しいようですが、結局同じようなイベントを何回もやっているので、毎回足を運ぶのが難しくなってしまうのでしょうね。だけど何かやらなければ意味のない会だから。（笑）

参加者も同じようなメンバーになりがちだと思いますが、できればもっと多くの会員に参加してほしいですね。一遍何かのチャンスで参加するとそれ以降は出やすくなると思いますね。何かのチャンスをどうやってつくるかですね。

でも今これだけ頻繁にやっていて毎回それなりの参加者を集めている訳ですから、それぞれの委員会の方々が相当努力していただいている結果だと思います。

—会報について

この協会は何かやらなければ意味のない会です。資格者団体や業界団体とは性格が違うので、協会の意味を持たせるには何かやって情報発信していかないといけません。

イベント等の事前の集客宣伝も大事ですが、開催結果の報告を会報に掲載してより魅力を感じてもらうように表現することが大事ですね。同時にメディアにも取り上げてもらう。業界の雑誌や新聞などにイベント情報を取り上げてもらえるようになると良いですね。取材を受けるイベントに。

そう考えると業界新聞や雑誌、美術関係の協会、大学等に当協会の会報を送ってもいいのではないかと思います。また当協会をご存じない外部の方にアピールする際は、aaca だけでは分からないので日本建築美術工芸協会を大きく表示しないといけませんね。今までの会報は会員向けだったから表紙も aaca で良かったけど、今後外部に広げるとなると日本建築美術工芸協会が目につくような工夫が必要ですね。

会員向けの会報だと一般的には委員会報告とかあるので、当会報にも委員会だよりがあると良いと思います。委員会に参加している委員の方々も他の委員会で何をやっているのかあまり知らないと思いますので、委員会だよりでそれを知ってもらうことにもなりますから。そして理想を言えば会員全員が何かの委員会に所属しているようになるといいですね。

会報は協会の重要な情報ツールなので有効に活用しなければいけないと思います。

イベント報告等の執筆は委員長に限らずいろんな人に書いてもらいたいですね。会報のページはもっと写真が多くても良いと思います。文字を少なくして写真の点数を増やしたり大きくしたり。そのほうが読む方も読みやすい。

AACA 賞の受賞者など地方で頑張っている建築家や大学の先生などに取材に出かけるのもいいですね。30 周年を機に大学などを会報配布先に加えれば展覧会の案内等も広がるのではないでしょうか。

—協会の未来、今後の展開について

いろんな人たちが集まっている協会なので、いろんな分野の人たちが入ってきてくれるとありがたい。他にこのようにいろんな人が集まる協会はないと思います。

建築美術工芸に限らず文科系の人たちも入ってきてくれて盛んな活動をしてもらえると嬉しいですね。

でもいろんな分野の人たちに広げるきっかけをつくるのはなかなか難しいので、そのような人たちに対する魅力をつくれるかが課題です。会員の方たちが活動するためにある協会なので会員が活動してもらわないと広がらないし、活動をしてもらうフィールドを作るのが我々協会役員の役目です。

自由に何でもできる協会であればよいと思います。場があってそれを会員が利用して何かやるということに役立てばよいと思います。会社にいればいろんな情報は入るけど、それと同じように当協会には大勢のいろんな人がいるので、会員がそこから様々な情報を得ることがメリットになる。そんな協会になっていくことを期待します。

＜聞き手飯田広報委員長より＞

会員の場づくり、会員活動を知っていただき、多くの会員に参加していただく。

さらに会員活動を盛んにしていただくきっかけづくりとなるよう会報を通じて我々広報委員会がお手伝いできるように役立ちたいと思います。

本日はありがとうございました。　＜2018 年 4 月 16 日＞

＜インタビュー出席者＞

aaca 広報委員会：飯田郷介委員長・野口真理会報担当副委員長
山崎輝子・山﨑和子・松本治子・田島一宏

会報 80 号に寄せて

今は懐かしい思い出に…

壁画、デザイン、版画家
日本建築美術工芸協会会員
高部多恵子

私は、いとこの故内井昭蔵に勧められた事がきっかけで aaca に入会しました。私が入会した頃は、建築美術工業協会と言われていた頃で、当時「コーヒータイム」と言う名前で、コーヒーを飲みながら会議、雑談をすると言ったものでした。当時は、少人数のこじんまりとした会でしたが、間もなく工芸協会になり、故芦原先生が会長で、見る見るうちに全国から個人会員だけでも 600 名近くが入会し、日本を代表する建築家、美術家、工芸家の先生方が理事に控え、大変大勢の立派な会に発展しました。

私もデザインをやっていた関係で広報委員に推薦され、表紙、レイアウト、カットなど広報誌発行に協力させて頂きました。初代委員長の宇津野様から、故柳沢先生、故玉見さん・・・等、aaca のために本当に一生懸命に努力されていたのには頭が下がる思いでした。私も会議の折は、一日も欠席せず頑張ったことが自慢です。

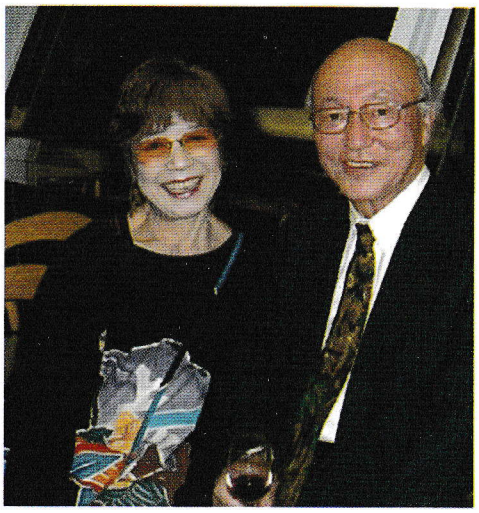
また、その頃は全国的に各県の会員の方々の協力で研修旅行が行われましたが、会員だけではなくご家族の方も一緒に参加することができ、和気あいあいとした大変楽しい会で、研修の後は、お酒を飲みながら、馬鹿話をしたり、カラオケやダンスをしたりで、有意義で楽しい時間を過ごす事ができました。おかげさまで日本中の立派な建築や美術、工芸を見学する事ができ、大変勉強になり、私の人生の宝物となりました。

あの頃は楽しかった…と言うと、今楽しくないのか…と言われそうですが、そうではなく昔の会員さんがお年で退会したり、お亡くなりになったりで、当時の方は、ほとんど今いなくなってしまい寂しくなってしまった事が残念に思うからです。

私も、とうとう古株になってしまったのかな～と寂しくおもわれます。

内井昭蔵 初代副会長　高部多恵子 広報委員（当時）　芦原義信 初代会長

玉見　満 広報委員長（当時）　芦原義信 初代会長　中島昌信 専務理事（当時）



加藤貞雄 副会長（当時）

最近の制作活動

女子美術大学ビジュアルデザイン（旧図案科）卒業後、研究室に残りましたが、その折、研究室の先生方と版画を始めたのがきっかけで現在も続けております。1996年、文化庁からニューヨークに版画留学させて頂いた事も大きかったですが…。ビジュアルデザイン科を卒業してできる仕事として今は壁画、本の表紙、カットなど色々やらせていただいてきましたが、先日、銀座の画廊で「版画とドローイングの個展」を終え、現在、日立製作所の取引先の経営者向けに配布する冊子の表紙を担当させて頂いております。どちらも私にとって大変魅力的でやりがいのある仕事です。

さて、私の作品のコンセプトですが「楽しい想像の宇宙」、「宇宙からのメッセージ」で、頭の中に浮かんだイメージを抽象表現しております。昔々、「月でウサギが餅つきをしている」と言った夢のある話が、もっともらしく伝えられてきました。今は宇宙にロケットが行き、色々な事が解明され、そのような夢のような話が消えてしまったのが残念な気がします。

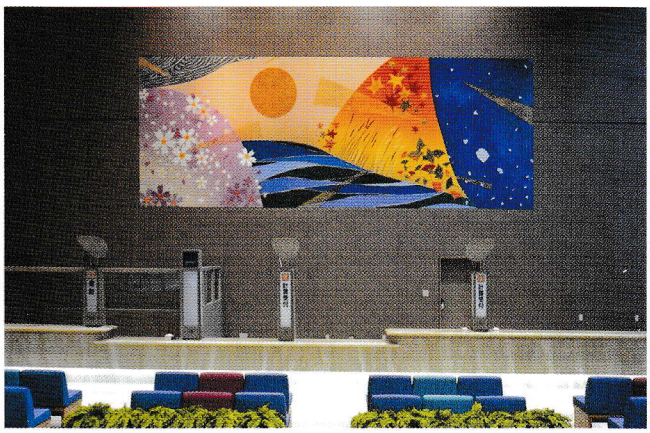
――こんな楽しい話があっても良いのではないか、と考え、私の想像の宇宙をテーマに、太陽、月、星、絵文字を中心に楽しく、遊びのある私の宇宙を自由に抽象表現しています。

「なにこれ～訳、分かんな～い」という見方ではなく、何だか分からないけど楽しいね、色が綺麗だね、面白いね、等、自由に感じていただければ幸いです。

これからも、アーティストとしてできる仕事は何でも貪欲にトライしていきたいと考えております。

版画「ブーメラン 18 -1」

陶壁画「フォーシーズン」　つくばエクスプレス　秋葉原駅地下３階コンコース



陶壁画「春夏秋冬」　伊勢崎市民病院

陶壁画「春夏秋冬」　伊勢崎市民病院制作風景

建築と美術工芸の融合とその公共調達システムの改善

環境建築家
環境デザイン研究所会長
東京工業大学名誉教授
日本建築美術工芸協会会員
仙田　満

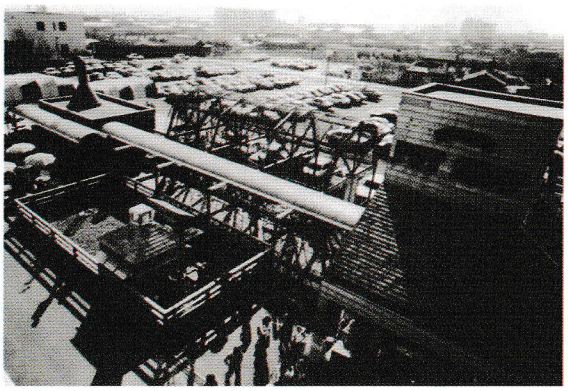
環境デザインという領域横断的な仕事をしてきて、今年は50年を迎える。私の環境建築家としての経験はまさに1965年頃から、日本の社会的変化とともにあったと言える。

1970年の大阪万博で、三井グループ館の設計チームに加わり、インテリア、グラフィック、光、映像、彫刻など、新たな領域に接触することができた。「空間から環境へ」が時代の言葉となっていた。その後、1970年代後半から、堤清二さん率いる西武セゾングループの商業開発にも加わり、多くのデザイナーやアーティストと協同した。その時代はデザイナーにとっても、アーティストにとっても大いに楽しい時代、創造力に満ちた時代だった。まさに建築と美術工芸の融合が望めば実現できた時代である。公共工事でも神奈川県の長洲知事が「工事費の1%をアートワークに」と掲げ、公共スペースの中に多くのアートワークが設置された。

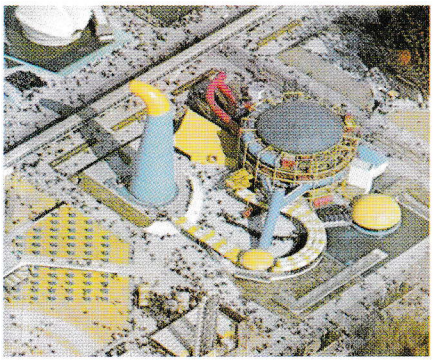
そのような傾向が失われたのは、やはりバブル崩壊である。公共事業においても建設汚職、官民の癒着などが社会問題化し、それまでの随意契約による建築家やデザイナー、アーティストの選定が困難になってきた。それとともに公共施設の中で美術工芸と言われた分野も、建築との融合とは遠く引き裂かれた状態となった。

デザイナー、芸術家、建築家、技術者を総合して知的生産者と名付けているが、我が国の公共事業の知的生産者の選定という、いわゆる公共調達は明治時代にできた法律、会計法に則っている。その原則は設計、デザイン、芸術制作という知的サービスも物の購入と同様、対価が一番安いところを選ぶというものである。もちろん法律では入札に適さないことは随意契約もできると但し書きされている。かつて1990年代以前はほとんど随意契約で指名されていた。本来的に住民の意思を負託され、選ばれた市長、知事が、我が町づくりを誰に委ねるのかは任されるべきで、随意契約は何ら問題がなかったはずだった。しかし、1990年代初頭の社会問題化より「随意契約は悪だ。公平性の原則に反する」という主張がまかり通り、現在に至っている。

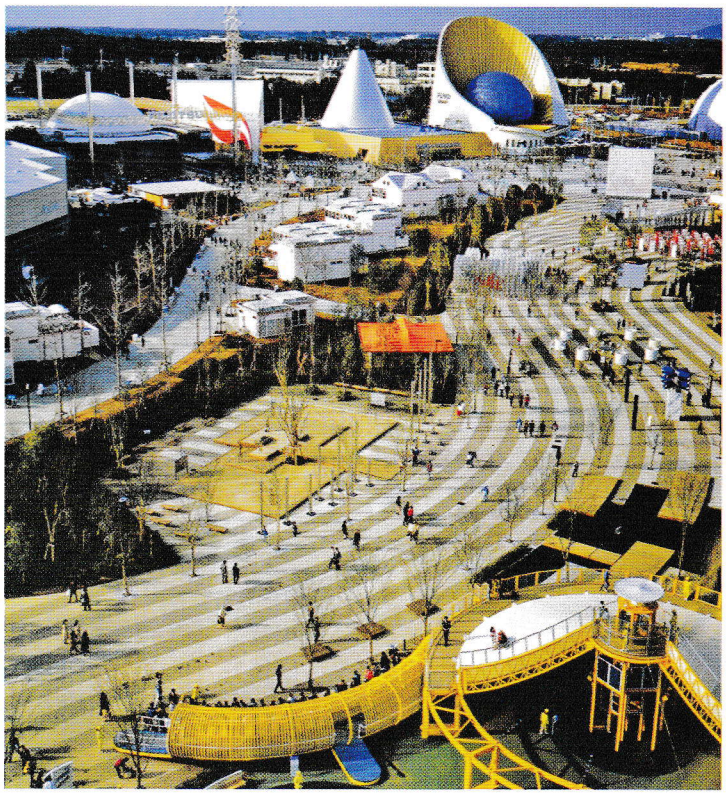
それを是としても、知的生産者を対価の多寡で選ぶという原則は認められない。世界的にも設計入札のようなシステムが蔓延しているのは日本ぐらいである。「対価の多寡で選ぶというのが最も簡単で、議会からも住民からも疑義は出ない」というのが多くの入札を行っている根拠である。しかし、それによりどれだけ美しい建築、都市、美術工芸の融合の機会が奪われたことか。今、我が国の自治体から発注される知的



西武春日井店



大阪万博三井グループ館



つくば万博

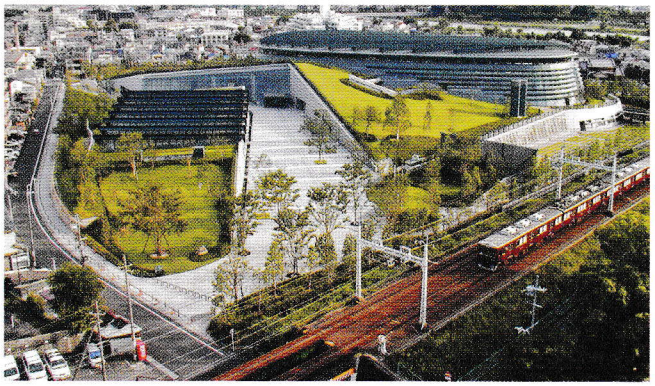
生産者の選定の90%以上が対価の入札による。中国では1990年代から国際コンペを取り入れ、世界のデザイン、技術を短期間で国内に取り入れることに成功している。アメリカはQBSという質で選ばなければならないという法律を1972年に連邦法として成立させた。

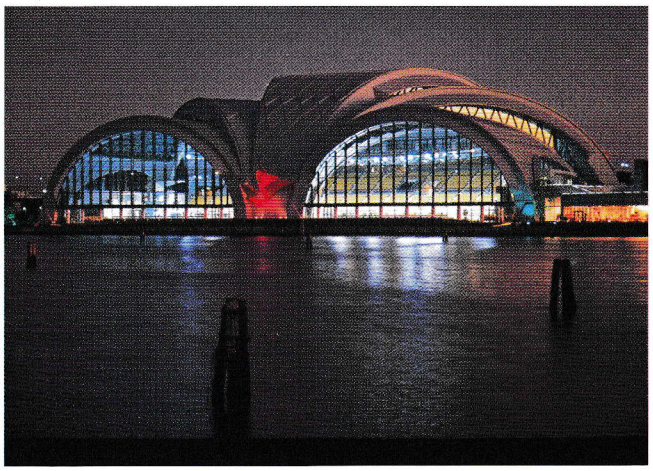
私はこれまで日本建築学会、日本建築家協会の会長時代を通して、設計者選定方法改善に懸命に関わったが、うまくいかなかった。設計者、デザイナー、芸術家、技術者等の知的生産者の公共調達の健全化のために会計法と、それに準ずる地方自治法を改正すべきだと考え、2017年9月末に学術会議の分科会委員長として、その2つの法律の改正をうたう提言「公共調達における知的生産者の選定に関わる法整備―創造的で美しい環境形成のために会計法・地方自治法の改正を―」を提出した。内閣府に属する日本学術会議が政府行政に対して、我が国の重要な法律である会計法・地方自治法の改正をうたった意義は大きい。問題はそれをどう実行できるかだ。学協会が一丸となって、議員立法として2法の改正か、特別法の成立をもくろんでいる。

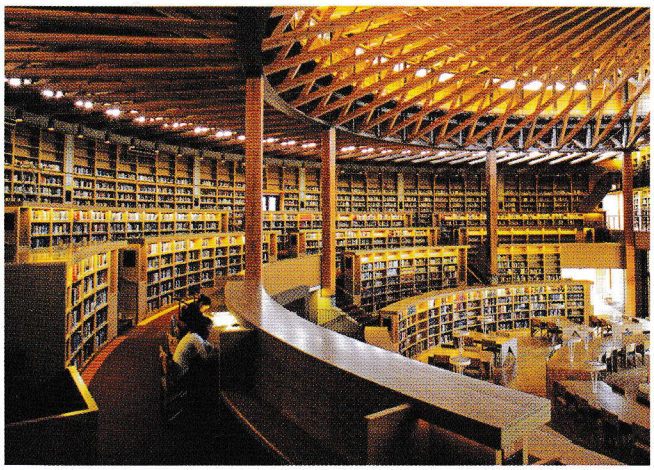
我が国は人口減少時代に入り、これから交流人口を増加させ、観光や国際会議等、多くの海外の方に来ていただかなくてはならない。そのためには良い建築・美術工芸が融合し、我が国の独自の美を海外の方々にアピールする必要がある。環境価値を上げねばならない。

そのためにも会計法・地方自治法の「対価が安ければ良い」という原則を「対価で選んではならない」と変え、もっと質的な評価により選ぶシステムに変えねばならない。法律が変われば、自治体にも選定のための予算や、選定のための外注費の獲得、審査員への謝礼、第2段階のコンペの有償化など、多くの点で改善されるだろう。今のプロポーザルはほとんどアーティスト、デザイナー、建築家に無償で参加させている。事業費の1%を知的生産者選定の費用にかけるべきだと思われる。それは我が国のように財政的に厳しい国や、地域にとって、効率的な事業を行う方法として、最も近道となると思われる。無駄なく、美しく、創造的な環境をつくりあげられる。我が国の建築と美術工芸の融合のために皆様とともに社会システムを変えよう。

浜松科学館


京都アクアアリーナ


東京辰巳国際水泳場


秋田国際教養大学図書館（第20回AACA賞　優秀賞 受賞作品）

会員活動レポート

彫刻ワークショップを通じた交流

彫刻家
二紀会委員
日本美術教育学会会員
日本建築美術工芸協会会員
堤　一彦

栃木県鹿沼市中央部に位置する粟野中学校は、周りを小高い山に包まれ豊かな自然の中にある。学校の外観は鉄筋コンクリートながら、教室に一歩足を踏み入れると、床や壁の羽目板、生徒の使う学習机や椅子など、ふんだんに木材が使われている。聞くところによると、全て地元粟野産の木材で、学習机や椅子は粟野商工会木材部会の耐久試験を経て導入されているという。粟野中学校の生徒たちは、いまでは贅沢といっていい環境と設備のなかで中学校生活を送っている。

昨年私は縁あって、この中学校において作品展示と彫刻ワークショップを行う機会に恵まれた。

招かれた作家は、同じ日本建築美術工芸協会会員の彫刻家重田恵美子氏、宇都宮大学で美術教育を教え、自ら画家である株田昌彦氏と私の3名である。

今回はオープンスクールの一貫として私たち作家が参加し、学校内に展示した作品について生徒たちと行うギャラリートーク、各作家によるワークショップを通じ、生徒たちはもとより保護者をはじめ地域住民の方々との交流を目指した催しであった。

ギャラリートークでは、中学生たちはそれぞれの学年やクラスに分かれ、初めて直に触れる作品を前に、作家の制作のテーマや個々の作品の意図などを聴き入るなかで様々な疑問や質問をぶつけてきた。思いもよらない新鮮な反応に私たち作家にとっても有意義な時間となった。中学生にとって普段目にする機会の少ない絵画の大作や実在の材料で制作された彫刻に触れ、彼らの感性に響いてくれたのであれば嬉しいことである。

ワークショップでは、近隣の小学生も参加して総勢60名の子どもたちを相手に、重田恵美子さんがご自身の作品制作の技法で針金を使用した小品つくりを行い、子どもたちも慣れない針金を作家のように自在に操ろうと奮闘していた。

私のワークショップでは、まず野外に展示された彫刻を全員で見学し、見るだけでなく彫刻に触ったりしながら鑑賞することから始めて、その後美術教室で大理石を使った作品つくりに移った。今回は、実際の彫刻制作に使う大理石を材料にしたペーパーウェイトを製作した。

大理石は珊瑚や貝などの石灰質が地下の熱によって結晶化したもので、石の材料としては比較的柔らかく、更に加工しやすいよう厚さを5mm程度のものを用意した。

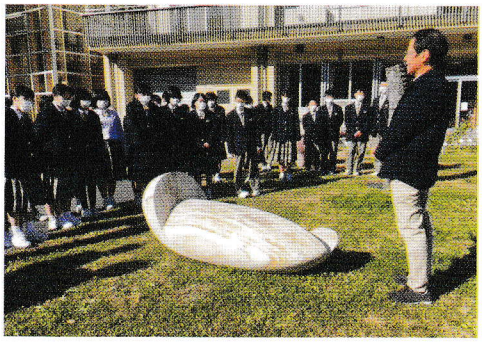
教室では、まず始めに一人一人に材料の大理石と加工のための金ノコギリやヤスリが配られた。今回の大理石は展示した彫刻の制作にも使っているイタリア・カッラーラ産の大理石で、生徒たちにミケランジェロのダビデ像と同じ石切場で採れた材料であることを説明すると、わーっと驚きの声があがった。始めは大理石の硬さに手こずっていた彼らも次第に道具のコツを掴むと、教室に大理石の粉がキラキラ舞う中、そこは中学生らしく夢中になって取り組んでいた。

私はこれまでも病院や学校、美術館などで「ものつくり」のワークショップを行い、大人から子どもまでいろいろな方々と交流を重ねてきた。こうした活動を通しいつも感じていることがある。人は素材を前にしたとき、自分の感性や手や身体の感覚を拠りどころにするということである。知識や経験知など無くとも、その世界に飛び込んでものを創りあげていく活動は、何より作業を夢中にさせる。

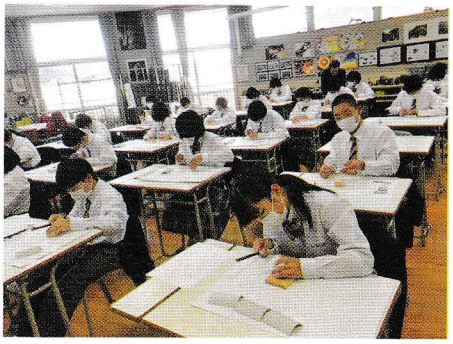
「手で考える」という言葉がある。ものを知ることは全身の感覚を使って認知していき、古来手や身体でものを考え道具や文明を創ってきた。「手で考える」ことは本来人に備わっているはずの感覚である。

現代においてこのような感覚を呼び起こす新鮮な体験となるようなワークショップをこれからも続けていきたいと考えている。

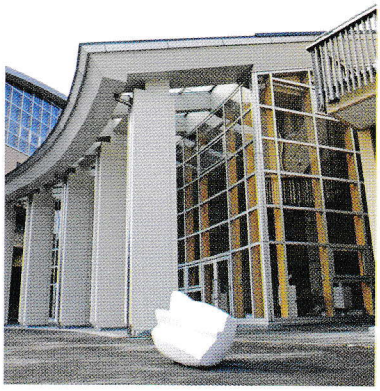
時間を忘れて製作に没頭する生徒たち。研磨するほど艶を増していく大理石は生徒たちの手のひらのなかで光を帯びていた。



ギャラリートーク



製作中の生徒たち



野外展示

バスケタリーの造形から見えるもの

作家
新制作協会協友
日本建築美術工芸協会会員
神　芳子

編み組みのテクニックを原理とした、主につる植物である籐の芯と皮を用いて線で構成した造形表現を“バスケタリーの造形”として発表しております。振り返りますと、長く続けている中でいくつか思うことがあります。

一つめですが、初心の頃はデザインを重視した立体を考えることが、とりわけ挑戦であるかのように思い込み、複雑な造形などを数多く制作発表してきました。しかし、ここ数年はテクニックの原理に素材を活かして趣を重ねたシンプルで美しい造形を心掛けています。

それは、籐との年月の中で編み組み原理の素晴らしさを再認識したからでもあります。活かすことに重点を置いたことで無駄な線が取り払われました。引き算を繰り返し、本当に必要な線を大切にした結果、シンプルで「美しい」と感じるフォルムが出現したのです。

しかし、体内に温存された個性は表われる、また動かすこと。私は作品にはこの個性を表現することが最も大切と考えます。

ここで二点の作品をご覧下さい。タイトル「起動」「守護 shin」は生物を感じる動きのある大きな造形としました。編みのテクニックを素材の性格の中に活かすべく、編む方向なども自然の流れのままに委ねた作品です。

二つめとして思うことは、六角形の不思議です。六角形をベースにした六つ目という組み方の特徴ですが、フォルムを小さくする時は角の数を減らします。六角形→五角形→四角形、或いは六角形→四角形というように。また、フォルムを大きくする時は、六角形→七角形にしたりと角の数を増やします。このように角の数を増減させることにより、全体のフォルムや一部が変化し、造形が出来上がります。

写真「空気物」は、六角形をベースにこのようにして制作しました。

この作品は全体にアモルファスなデザインで不安定な感じもしますが、驚いたことに中心を2本の指で支えただけで、形が崩れることなくしっかりと自立しました。このことにより、10年程前から私の中で漠然としていた感じがはっきりとしたものになりました。

「六角形は強い!」。実は、自然は巧みにこの構造を利用しています。

「蜂の巣＝ハニカム構造」などがそうです。また、人々の生活の中でも昔からの言い伝えや風習として、六角形で作られたかごを軒先に吊るすと魔除けになるとされていました。長く制作を続けていますと、今回のように偶然「空気物」を制作したことにより、昔感じていた思いが蘇り、疑問が解消されたりすることがあります。改めて六角形と自然界の因果関係の不思議に魅了されています。そして、どうしてずっと心に引っかかっていたのかも自分の中で不思議でしたが、六つ目と歩んでいく自分の定めとも感じとりました。

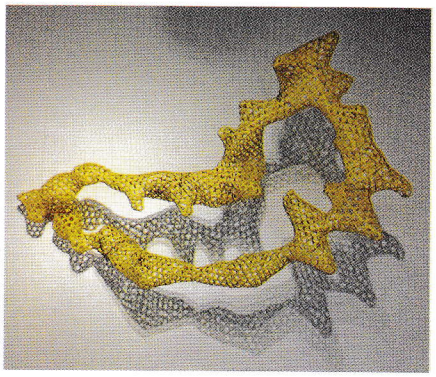
バスケタリーとは、かご作りのことです。一本の線から立体を繊維素材を用いて作り上げます。可塑性を持つものと異なり、元に戻ろうとする力があり、編み組むことにより柔らかな質感も鋭さも自在に生み出すことができます。また水を通し、風、空気を通す軽やかさを見ることができます。かご作りはテクニック・フォルム構造の面白さがあります。

生活に役立つ機能性も兼ね備えています。歴史もとても古く、かつて農業が盛んだった日本に於いても、多くの編まれたかご、民具が活躍していました。

私は自然素材にこだわって制作していますが、作家の価値観のままに、かご作りはどんな素材を使っても良いと思っています。世界中にかごの愛好家は多く、私もかごに魅了された、そんな一人でもあります。

守護 Shin

起動



空気物

インドネシアでの文化交流を通じて

ガラスアーティスト
株式会社 野口硝子　代表
日本建築美術工芸協会会員
ノグチ ミエコ

チャリティイベント交流

インドネシアでイベント開催を始めきたっかけは海外での交流をしていくのにどの国が面白そうか検討した結果、〝若い人たちの笑顔が印象的なインドネシアでガラスアートの文化を紹介してみたい〟と始めた企画です。活動にあたり何かインドネシアという国に貢献できることも頑張りながら文化交流、親交を深めたいとインドネシアはボゴールにある自閉症児童のケアセンターの方々と一緒に子供達との商品開発やチャリティイベントをジャカルタのショッピングモール Senayan squere 様の支援を受け開催させていただいております。

国からの福祉支援のないインドネシアでは現地スタッフが自分たちで制作した物で施設の運営をしていけたらこんなすばらしい事はないと願って続けている活動です。

ASEAN友好協力45周年　記念品制作を終えて

今年 2018 年が ASEAN（東南アジア諸国連合）と日本の友好 45 周年ということで 2014 年から 5 年間インドネシアでチャリティイベントを開催していることのつながりからご縁をいただき記念品の制作をさせていただきました。ASEAN は東南アジア 10 カ国からなる共同体で本部がインドネシアにあることから日本の ASEAN 大使を通じての寄贈と成りました。

インドネシアでの交流の中から 45 周年の記念品を日本を代表して依頼され、一年かけて作りこんできた最新作を ASEAN のミュージアムへ寄贈させていただけた事は大変光栄でした。寄贈式では現 ASEAN 総長のリム ジョクホイ氏を始めスタッフの皆様や関係者の方々にも喜んでいただけて大変嬉しい瞬間となりました。

作品のタイトルは 「10^{x}m - Where are you ? 」10 の x 乗 m あなたはどこにいるのか？ と問いかけるタイトルで地球から 10 万キロ離れたところから眺めた 10^{8}m 地球から始まり 10^{13}m 太陽系、10^{21}m 天の川銀河、10^{24}m 銀河群、一億光年先の 10^{30}m 宇宙深部までを表現しています。地球を基準にしたスケールの違いが異なる風景を形作っていく様子に想いを馳せ「世界とは何か」「自分はどこにいるのか」存在の根底を問いかけるアートとして制作致しました。今回のためにもちろん地球の表面は ASEAN 諸国を中心にイメージしたもので皆で大いに盛り上がりました。

海外でのパブリックアートへの取り組み

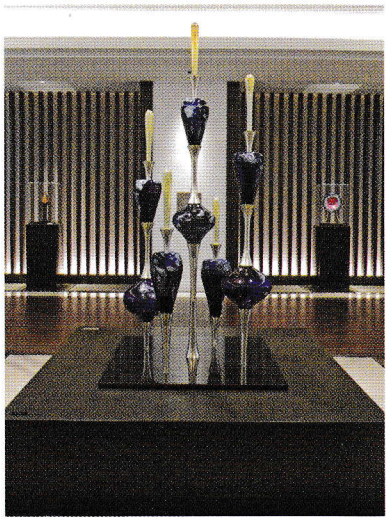
またインドネシアでは自身最大となる作品制作をさせていただくきっかけを数年前にいただきました。完成したばかりの新しいホテル FairmontJAKARTA のアートのコンセプトが一国のイメージにとらわれない自然をテーマにしたものと言うことで、作っている作品の世界観と共通すると任されたアートワークです。納期がなく工房スタッフ総出で制作したのも今では思い出となっています。好きなように制作し見ていただく個展での作品とは違い強度や安全性、経年劣化も考慮しなくてはならない作品は制約はありますがたくさんの方に見ていただけるという作家として大変やりがいのある仕事をさせていただきました。

続けてきた文化交流を通じて海外で作家として様々な機会をいただけたこと感謝の気持ちでこれからも新しい作品に取り組んでいきたいと思います。

「10^{x}m - Where are you ? 」

ASEAN の皆様と

Fairmont hotel の
アートワーク
souund of water



Fairmont hotel のアートワーク form of space

人と物と場について考えながら

テキスタイル造形作家
日本建築美術工芸協会会員
岡本直枝

私はテキスタイル造形作家です。繊維素材を染め、糸を作り、織ったり編んだり。フェルトも羊の毛を染めるところから作ります。 そしてタペストリーや立体作品を制作し、国内外で発表しております。2012年にイタリアの、2013年にアメリカの公募展で大賞を頂き、作家活動を始めてほぼ10年の節目に大きな励みになりました。

また女子美術大学の非常勤講師として、教育にも少し携わっております。

その様な建築素人の私が何故この会に？と言いますと、それは、私の作家活動の基調にある視点が、「人と物と場」だからです。

ずっと物を造って表現して来ました。まず車のデザイナー、その後テキスタイル造形作家、と言う二つの立場から。

私は最初にプロダクトデザインを学びました。武蔵野美術短期大学の生活デザイン科ですが、ここはバウハウスの影響が大きな学科で、インテリア、建築の授業も必須でした。

卒業後、日産自動車株式会社、デザイン本部に入社。足掛け18年のうち、最初の12年はカラー＆マテリアルデザイン部署に、その後エクステリアデザイン部署に所属し、セドリック・グロリアやシーマなど担当しました。代表車は初代シーマです。

自動車は大型量産品の代表格ですが、一家に一台、その暮らしと密着し、各々生活者の暮らしの価値観や美意識を端的に表現する媒体でもあります。私の造形表現の基盤はここで育ったと言えます。

車のシートクロスデザインからテキスタイルに興味を持ち、退職して、テキスタイルを勉強する為に武蔵野美術大学大学院に入学。

丁度その前後、主人が仕事でイギリス5年、スイス3年間の赴任。特にイギリスでは、物の作り方の変革期である産業革命について、各地の産業遺産を追い。また大学院の建築の授業でガーデンシティを知り、自分達が暮らしているミルトンキンズが最後のガーデンシティである事に気づいて、ガーデンシティも回り。物と暮らし、社会の変化について、我流でレポートを作成しました。日本、イギリス、スイスと暮らしてみて、物事の成り立ちがその土地と深く関係している事も実感しました。

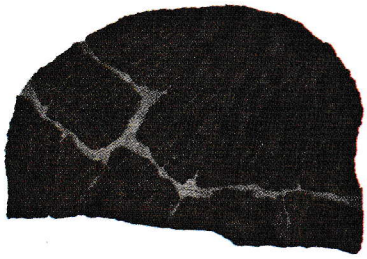
物とは何か、と言う事を考えると、それは人の行き方、また自然風土歴史等々も含む場との関係についても思う事になります。今はそれを、アートを通して考え、現したいと思っております。

それは特別な事ではないのではないかと思うのです。全ての人々が、居ながらにして自分も表現者である事を自覚し、そこに美があり、それが当たり前の日々の営みであると言う意識さえあれば…、と繊維のホコリにまみれながら思ったりもするのです。

この会の活動を知り、建築と美術の関係がいつも蜜月である事は素敵だ、と思い入会を決めました。

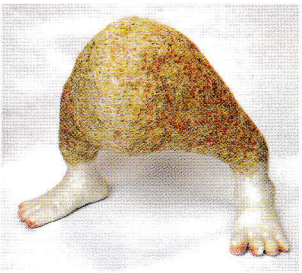
さて、自己紹介と言うより、何やら空を舞う様な文章になってしまい、大変恐縮です。

この様な私がお役に立てる事があるのか不安でもありますが、ゆっくりとやって行きたいと考えております。何卒、宜しくお願い申し上げます。



【走る雨】
w300cm・h190cm・d5cm
ウール、麻、シルク

【笑う家】
w250cm・h190cm・d5cm
ウール、麻、シルク



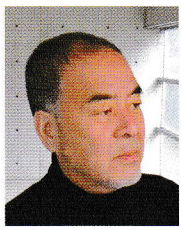
【歩歩Ⅴ】w70cm・h50cm・d 50cm　ウール、麻

【歩歩Ⅵ】w20cm・h20cm・d 20cm / 1体　ウール、麻、アルミ

平成 29 年度　AACA 賞

● AACA 賞　優秀賞

一華寺　無尽塔



宮森洋一郎建築設計室代表
日本建築美術工芸協会会員
宮森洋一郎

無尽塔は臨済宗のお寺の共同墓です。骨壷に入ったままではなく、亡くなられた方のお骨は土に還してあげたいという住職の思いから始まりました。檀家の工務店の紹介を受け、住職・私・工務店の三者が何回も共同墓のあるべき姿を語りあいました。宗教建築ということで、私は建築家として光と空間をテーマとした緊張感のある建築を設計しようと、かなり意気込んだ状態でスタートしました。しかし、「土に還ったお骨は雨を受け、養分となって庭に花を咲かせ、その花がお墓に供えられます。庭の木々は実をつけ、鳥がついばんで、新たな生命を運んでいきます。庭ではお参りに来た人たちが、亡くなられた方々に感謝しながら、穏やかな時間を体験します。そんな場所にしたいんです」という住職のお言葉で肩の力がスーッと抜けました。力を入れてがんばると逆効果になりそうだと気付かされました。著名なステンドグラス作家や、陶板作家に依頼して、という話題も何度か出ましたが、三者ともそのような方法に違和感をもつようになりました。

私自身、そのお墓に入るのなら、誰々作のお墓、と言われるようなお墓であれば、作者を好きであれ嫌いであれ、なんとなく抵抗を感じるような気がしました。誰かがつくったものではなく、出来たものであって欲しいという気がしました。それがたまたま自分の感性に通じるものであれば、抵抗感を感じないに違いありません。

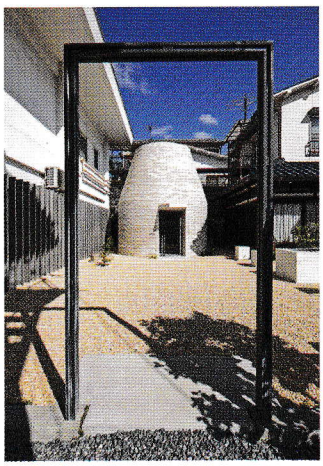
セメントや焼成によってではなく、にがりの成分を使って自然乾燥で凝固させるブロックの存在を、知人の建築家中薗哲也氏の展覧会でたまたま知ったばかりだったので、さっそく氏に相談。呉市ゆかりのカキ殻を使っても、しっかりとした強度が確保されることが確認され、一気に方向性が決まりました。

組積造とすることで、構造と仕上げの区別がないこと、崇城大学中薗研究室の学生さん達の協力を得て少しずつ表情の異なる手作り感のあるものの集合になること、一つ一つに檀家さんに祈願を記してもらいたくさんの人の気持ちが形となること、などなど住職の思いを実現するお墓にふさわしい工法だと皆が感じました。

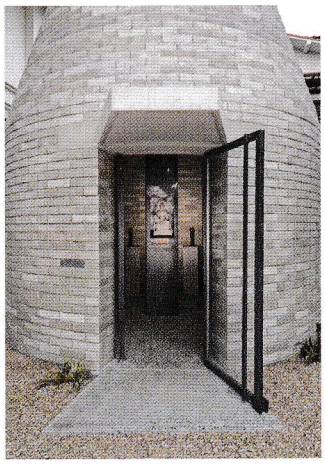
実際の工事は職人さんも含めて、すべてが初めての試みなので、大変ではあるものの、楽しい作業の連続でした。住職をはじめ、皆が作業に加わりました。連立方立てのアルキャスト、擁壁のコンクリート打放し、鉄のリン酸処理、全てフタをあけてみないと解らないものばかりで、不安と期待の連続でした。なんとか完成した日には、喜びとともに気が抜けて、寂しい思いに皆がなったように思います。

施主→設計事務所→工務店の流れではなく、工務店が檀家であったことで、三者が一体となって結果をつくっていくことができました。完成の時の工務店代表のほっとした表情が忘れられません。

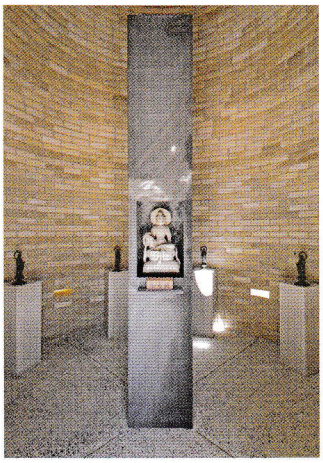
この度、AACA 賞優秀賞を受賞できたことは、関わった全員が喜び、誇りに思っております。AACA の「・・・人々の連携と協力により、建築に係る芸術的環境の創造と保全を図り、もって我が国の文化向上発展に寄与する・・・」の設立目的は図らずも私達の気分を代弁してくれているようであり、素直に喜ぶことができています。



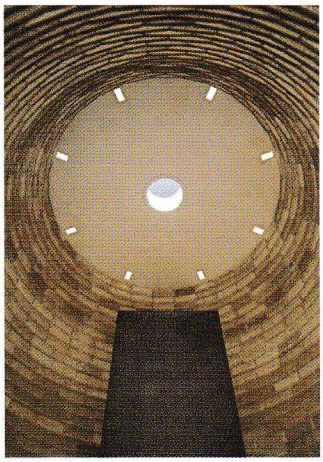
南面外観



無尽塔入口



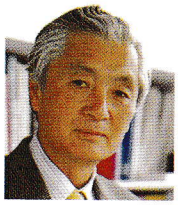
仏座



天蓋

● AACA 賞　特別賞

洗足池の家 /MONOLITH



城戸崎建築研究室
日本建築美術工芸協会会員
城戸崎博孝

建築が完成した時点で、建築家がその後の価値構築に関与する機会は極めて少ない。この「洗足池の家 /MONOLITH」も、まさしくこの試練に耐えなくてはならない建築である。

敷地は、大田区洗足池の近くにある閑静な住宅地である。この地区は、行政が環境保全のため、特に厳しい景観条例が施行されており、建物の隣地後退距離 2 メートルなどの乱開発抑制がなされているため、自ずと建物が建てられるエリアが限定されてくる。この厳しい規制条件を満たしつつ、都心地でもある故、容積を出来るだけ有効に活用したいと考えるのは至極当然のこととなる。そこで建物の半分を地中に埋めることで容積を確保した。

建物内部は、宇宙に通ずる空の変幻を室内へと写し込む「天空の間」と、外部の基壇と室内のフロアとのレベル差が囲われた安心感をもたらす「地上の間」、予想を遥かに超える大空間を孕んだ「地底の間」からなる、三層の空間で構成している。天空から地底までを貫く階段や吹抜けを介して光と陰が交錯し、緊張感を纏った空間の中に、品格ある遊び心の芳香が漂う小宇宙を生み出している。

この住宅の構想の原点には、映画「2001 年宇宙の旅」において、類人猿に知恵を芽生えさせるきっかけとなる黒いスレート =Monolith が立ち現れる一連のストーリーが強く影響している。

建築における Monolith を求めて、石・コンクリート、鋼板、ガラスの三つに整理された要素によってユニバーサルな形態言語の構築に徹している。外装には溶融亜鉛メッキリン酸処理を施した鋼板、床にはメタルブラックと称する石を組み合わせることで、均衡のとれた端正なファサードに対して変化に富んだ表情を与え、その佇まいに深みと品位をもたらしている。

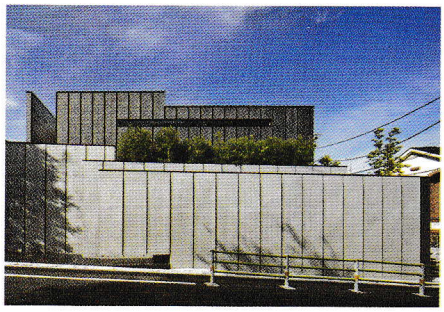
精緻なディテールワークの結晶であるこの住宅は、そこに身を置き体感することでようやくその真価を表出しはじめる。例えば、一筆書きでなぞれるほど寸分の狂いなく揃う床・壁・天井の目地や、外壁には等間隔に 10mm のスティールプレートのリブを埋込み、時間の経過によって影を演出し、その存在を際立たせている。表装はディテールの内に秘めた本質を引き出すためのメディアであり、数々の細やかなこだわりは、結果として不純な要素を消し去り、建築を純粋な Monolith へと還元していく。余分なものを排除し、建築家、施工者、家具の職人、関わる全ての人が徹底的に美を追い求めた空間は、その美しさを必ず人に伝えると信じている。その品質が、住まいの品格をつくる。

エクアドルには「ハチドリのしずく」という民話がある。山火事が起こり、多くの動物が避難する中、小さなハチドリだけが、火事を消そうと一滴の水をせっせと運んでいた。避難する大きな動物たちは、その無駄とも言える行動を笑ったが、ハチドリはこういった。「僕ができることは確かにこれだけ。でも、僕は今、自分のできることをやる」と。

巨大建築や環境問題に配慮した建築だけが社会貢献しているわけではない。目先の経済効率ではなく、後世に建築技術を伝える文化的価値を持つ建物が必要とされている。濃密な細部の意匠により、熟達した高度の建造技術の育成について、この建築が社会に寄与するところは大きいと考える。

ディテールの飽くなき追求は、時には自分を超えた何かが立ち現れ、その瞬間に身を委ねた結果、実現できた空間ではないかと考える。この「洗足池の家 /MONOLITH」は、孤高の建築を求める姿勢を保つことで、健全で品格のある遊び心の芳香が漂う、天空と地底を結びつける上質な住空間が創出されたと思う。

純粋無垢な Monolith に時間の経過が重ねられていくことで、この建築を次の次元へと昇華させていくのではないかと期待している。



「洗足池の家 /MONOLITH」外観

撮影：45g Photography　小島純司

● AACA賞　奨励賞

特別養護老人ホーム 成仁ハウス 百年の家

株式会社 内藤将俊建築設計事務所　代表
日本建築美術工芸協会会員
内藤将俊

老人ホームの超克

入居者一人ひとりの個性と生活リズムを尊重する「個別ケア」の実現を目指したユニットケア型特別養護老人ホームである。10～11人が生活する「ユニット」は、プライバシーが保護された「トイレ付の完全個室」と交流や食事、団らんをするための「共同生活室」により構成されており、そこで行われる介護は、ユニットに固定配置された顔なじみのスタッフにより行われている。本建築は、そのユニットが1階に2つ、2・3階に4つずつの合計で10のユニット（110の個室）で構成されている。

2001年に厚生労働省が「全室個室・ユニットケアの特別養護老人ホーム」の整備を発表して以来、瞬く間に全国の3割程度の施設がユニットケアを採用するまでに至っている。しかしながら、（一社）日本ユニットケア推進センター副会長を務める本施設の理事長は、特に大規模な施設において、その普及速度に加え、十分とは言い難い設計期間や建設費等の条件により、施設数や多様な運営コンセプトに見合うだけの十分な建築バリエーションが生み出されてはおらず、未だ多くの可能性が残されていると当初から感じているようであった。

実際、同規模以上の施設では、複数のユニットの中央に外部空間を配した「中庭型」やユニットを並行に配置した「並行配置型」が大きな割合を占めており、居室への建築基準法上の採光や換気を容易に確保することができる反面、長い管理動線を含み、居室どうしが互いに見合ってしまい、そして、ユニット間の関係性が希薄な施設が数多く存在している。その様な経緯から、運営者と共に、早い段階で別の新たなタイプを模索し始めたことは自然な流れであったように感じる。

結果的には、全ての入居室で完全な眺望や日当たり、通風を確保するため、4つのユニットを中央のロビーで連結して積層させた「十字型プラン」を計画した。廊下が消滅するこの計画では、管理動線が最小化し、効率的かつ最善のケアの実践が可能となっている。

自力移動が困難な重介護度の入居者にとっては、「むら」のように感じられるであろう、最小サイズのコミュニティであるユニットの中心には、様々な方向から光や風がもたらされることで天候や季節の移ろいを楽しむことができる、井戸端のようなオープンスペース（共同生活室）を配置し、それを取り囲むように11の居室を計画している。

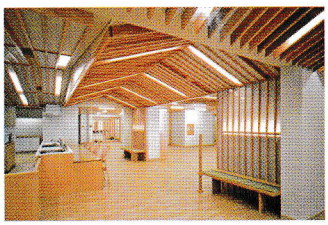
次に、「まち」 に相当する、中間サイズのコミュニティである4つのユニットが集まる十字型の各フロアの中央部には、リハビリやレクチャーが行える広場のようなオープンスペース（ロビー広場）を、「都市」に相当する最大のコミュニティである施設全体の入口正面には、地域住民の活動や全入居者が集いイベントを行える公園のようなオープンスペース（地域交流スペース）を計画している。

そして、天井だけを眺めて生活する入居者を含む全員が空間の多様性や分節を感覚的に捉えることができるよう、ユニット玄関、食事、キッチン、談話空間等、活動の違い毎に天井を分割して切妻状とし、各々が直交するよう棟方向を変化させ、間仕切り壁を一切設けずに空間を連続させる計画としている。これにより、1人から100人等の様々な大きさのグループに対応した空間の組み合わせが可能となり、一般社会と同様に人々の多様な関係性が生じるよう配慮している。

さらに、各階で平面が重なる空間の天井方向をも直交させ、突板や家具、建具、床材の色彩を階ごとに総合的に変化させることで、サインが認識できない方々に対しても、空間の違いを感覚的に、かつ的確に伝える計画である。

既に、竣工後3年近くが経過し、建築が運営コンセプトと一致することで、様々な効果が生じてきている。老人ホームという分野において、数々の試みを後押しして下さったクライアントの方々に心より感謝するとともに、この建築が要介護者の方々の終の棲家として多様な社会性を生むことを切に願っている。

川越しに見るエントランス側外観（夕景）



棟方向が直交した連続する切妻天井（エントランスからユニット内の共同生活室をみる）

4つのユニット（むら）を繋ぐロビー広場

井戸端のような共同生活室に面する和室

写真撮影者　小川泰祐

AACA 賞受賞者紹介のつどい　第1回・第2回開催報告

今年は aaca が設立されてから 30 年目の年となります。今回の「AACA 賞受賞者紹介のつどい」はその記念事業の一環として開催されました。AACA 賞が授与されるようになってから昨年で 27 回を数えます。

この賞は、都市デザイン、地域デザインからランドスケープ、建築、工芸、絵画、彫刻、環境美術、グラフィック、ディスプレイ、インテリア等のほか、素材やエネルギーの領域に至るまで広範囲にわたる作品を対象としています。毎回すぐれた多くの応募作品が集まり、審査する選考委員会ではいつも難しい判断を迫られます。一般の建築賞や美術賞とは性格を異にしていて、建築家、美術家、工芸家をはじめ様々な分野の個人や団体が連携協力して出来上がったものを表彰するのが大きな特徴です。

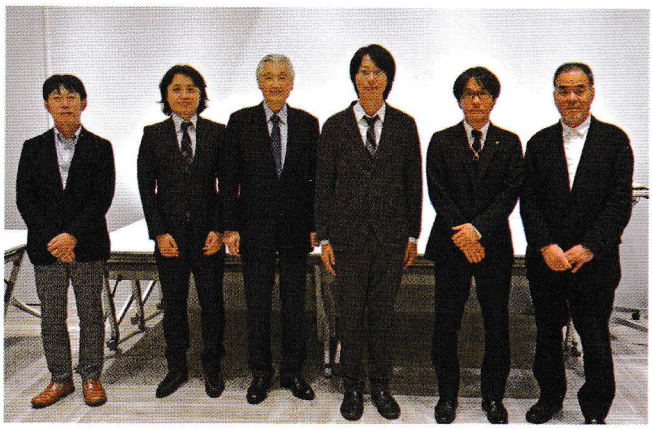
毎年秋に審査が行われ、AACA 賞、優秀賞、奨励賞、特別賞に加えて将来ある有能な新人を表彰する芦原義信賞等の作品が選ばれます。受賞者には 12 月に行われる当協会の設立記念会において賞牌や賞状が授与されます。2015 年までは受賞者の一部の方には簡単な作品説明の機会がありましたが、受賞作品全体の姿が見えにくく、会員からの、受賞者の講演をやってはどうかという意見も多く聞かれていました。そこで一昨年の第 26 回 AACA 賞からは、表彰式での簡単な説明とは別に、独立したイベントにおいて受賞者に作品だけではなく作者の紹介も含めてお話をいただき会員との交流を図る「AACA 賞受賞者紹介のつどい」を開催することになりました。今年も文化事業委員会と表彰委員会の共催で、サンゲツ品川ショールームをお借りし 2 回に分けて受賞者の皆様と会員の交流を行います。

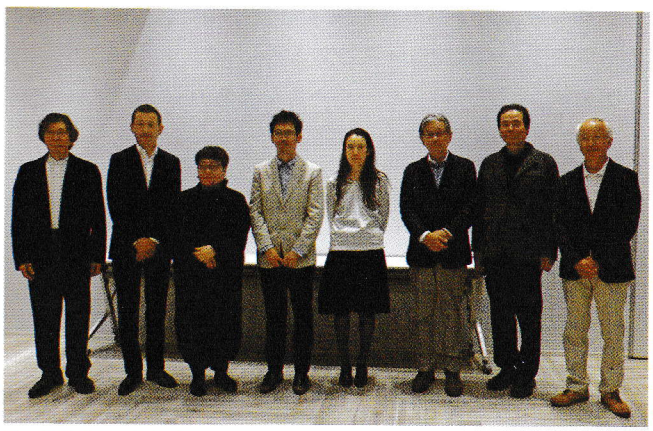
第 1 回は去る 4 月 24 日夕方に開催しました。前半は、AACA 賞受賞の畠山さんグループの熱のこもった絶妙なお話をはじめとして、優秀賞の宮森洋一郎さん、奨励賞の内藤将俊さんグループ、特別賞の城戸崎博孝さんがそれぞれ限られた短時間の中でユニークなお話を披露していただきました。第 2 回は 6 月 4 日に開催しました。芦原義信賞の越野達也さんの若さ溢れるお話から始まり、優秀賞の笹山恭代さん、同じく優秀賞の清水聡さん東利恵さんチームには、時間をフルに使って熱い作者の思いを語っていただきました。特別賞の歌一洋さんは残念ながら当日体調を崩されたためスライドの映写のみになりましたが、その独特な作品群について選考委員から解説もあり、十分に意図が伝わったようです。

第 1 回第 2 回を通して、皆さんのお話は作品の説明だけではなく、作者の人となりや今までの活動が理解できるような素晴らしい期待以上の内容でした。両回とも 1 時間半程度の講演の後、同じ会場で懇親会を行い、受賞者の皆さんと会員とが親しく交流し、さらなる理解を深めることができたように思います。

今年、これから募集する第 28 回の AACA 賞では、30 周年記念事業として新たに美術工芸賞を設け、最終審査を公開するなどの例年とは違った企画を用意しています。多くの方の応募をお待ちします。

（表彰委員会委員長、AACA 賞選考委員会副委員長
可児才介）


第一回講演者の皆さん


第二回講演者と審査委員の皆さん

第192回aacaフォーラム開催報告

現在のアートをめぐるいくつかの問い
～アートキュレーションの視点から～

講師：東京都現代美術館学芸員　藪前知子氏

第192回aacaフォーラムは、2018年3月27日AGCスタジオにて、現在のアートをめぐるいくつかの問いについて、アートキュレーションの立場から、東京都現代美術館（MOT）の学芸員である、藪前知子氏にお話し頂いた。

昨今キュレーションという言葉が注目されており、アートのみならず、ファッションやフードなどの世界でも多用されるようになった。新しく何かを作り出す行為だけではなく、今ある無数の情報の中から、ある世界観に基づいて情報を拾い上げ共有する行為に対して、クリエイティビティを見いだすことに共感が集まっているとのこと。

では、狭義のキュレーターである学芸員とはどんな役割なのか。一言でいうとアートプロジェクトを企画する人の総称である。

展覧会のコンセプト立て・作品選定・論文執筆が本来の業務であるが、明確に分業化されている欧米とは異なり、日本の学芸員は上記に加え、資金調達やプレス対応、場所の確保や交渉、アーティストの滞在手配まで、業務内容は多岐にわたるそうで、幅広いマネジメント能力を必要とされる業務である。

そして、講師の専門分野である現代美術は、「今」の表出であり、特に東日本大震災という衝撃を経て、世界的な潮流でもあった、社会に介入するアートが日本でも本格化していく一方、制作され美術館に収蔵された段階で、作品は過去になる矛盾をはらむ。その矛盾に常に対面している講師が語った「キュレーションとは『今』と『作品』を媒介することであり、今生きている人間の代表としての視点を持って『なぜ、今、この作品を、この場所で、見せなければならないのか』というアクチュアリティ（＝時宜性）をいかに作ることができるかが重要であり、それは現代美術のみならず、全ての時代の美術を扱う場合にも必要な視点である」との言葉には含蓄があった。

実例紹介の前半は、その社会的な流れの中で講師がMOTで企画した常設展「私たちの90年　1923-2013」（2014年）及び、夏休み時期の企画展「おとなもこどもも考える　ここはだれの場所？」（2015年）をベースに、作家という個別的な感覚から発想されて生み出される作品を、一つの視点から統合し、展示・公開する中で、「公共性とは何か」というラインをキュレーションで担保する様を見せて頂いた。

一方後半は、美術館から飛び出して町に展開するアートについて。

東京都現代美術館は、2016年6月から今年度末まで、大規模修繕のため休館しているが、清澄白河の町の中にアート活動を展開させるMOTサテライトが2017年春と秋の二回開催された。清澄白河は、歴史ある下町としての強いコミュニティが存在しつつ、ブルーボトルコーヒーをはじめとしたサードウェーブコーヒーがいくつも進出しており、新旧の対比が熱い地域である一方、ジェントリフィケーションも進行しており、先鋭的な文化が残るかどうかの瀬戸際な地域である。題材となった「MOTサテライト2017春往来往来」では、地域に住む様々な分野の作家を「地域パートナー」として盛り立てる形で、町の魅力を多方向な切り口で掘り起こす様子が生き生きと紹介された。ホワイトキューブの中でキュレーターが主体的に方向付ける展覧会と異なり、地域とアートを結びつける触媒となり、やがてコミュニティが自立して歩み始められるよう手助けする試みであり、キュレーションという活動の幅の広さが興味深い。

その他にも、札幌トリエンナーレなど興味深い事例を多くご紹介頂いたが、誌面の関係で割愛させていただく。

今回アート事例を豊富にご紹介頂いたが、「アートのアクチュアリティ」と「公共性」について一貫して深く考察されていることが印象的であった。公共空間と言葉にすると未来永劫変わらない概念かのような錯覚をしてしまうが、時代によって「公共」はどんどん変化していく。その変化を切り取る視点を露わにすることが、現代美術のキュレーションであることを改めて見直すよい機会となった。

（フォーラム委員会委員　津野恵美子）

伊東豊雄設計作品見学、東京工科大学訪問報告

広報委員会

広報委員会では、協会の広報活動の一環として、会員ではない企業、大学、自治体などとのネットワークを広げていくため、相手先への訪問、見学なども行っています。今年の3月には、文化・芸術活動に力を入れている埼玉県川口市のご好意により建築家伊東豊雄の最新作である「川口市めぐりの森」をご案内いただきました。また5月には八王子市にある東京工科大学を訪問し、建築・アートなどを学ぶ学生さんたちへ協会の活動を紹介する機会をいただきました。

建築家伊東豊雄設計「川口市めぐりの森」と「ヤオコー川越美術館」を訪ねて

桜便り間近の3月中旬、広報委員会企画による伊東豊雄最新作の見学会に参加しました。それは、川口市の竣工間近の火葬場「川口市めぐりの森」で、赤山歴史公園に隣接しています。川口市経済部産業振興課のご担当者に案内されて植栽工事半ばの入口に立つと、森と水辺に囲まれた風景の中に、白い波が雲のように見える曲線の庇とその奥に見える階段状の屋根が一体となり、外観は、まるで巨大な現代彫刻のように感じられました。そして屋根の上に施された植物は、数年後には緑が育って古墳のような姿になるのではないかと思えたのです。伊東豊雄建築設計事務所のご担当者に案内され近づいてみると、柱と屋根はシームレスに繋がり、エントランスホールに入ると、柔らかな自然光に包まれています。間接照明で照らされた湾曲した天井と、半透明のガラススクリーン、床面には有機的な形の椅子が配置され、まるで胎内にいるような安らぎを覚えます。

最近ネットで検索し、開館後の樹木で覆われた屋根の様子が紹介されていました。それは周囲の自然に溶け込み、安らぎの空間をという伊東豊雄のコンセプトをそのまま味わったような気がしました。

見学後の楽しみは昼食です。明治9年創業の川魚料理店「萬店」で鰻の骨までいただき、その後やはり伊東豊雄が設計したヤオコー川越美術館を見学しました。ヤオコー川越美術館は、ヤオコーの川野会長が蒐集した画家三栖右嗣（みすゆうじ）の作品を展示する100㎡ほどのこじんまりとした美術館です。そして帰り際に、隣にある氷川神社にて鯛のおみくじを釣り上げて、五感満足の一日でした。

（山崎輝子）

東京工科大学八王子キャンパスを訪ねて

五月晴れに恵まれた5月中旬、岡本賢会長が大学の設立時より、大学キャンパスのマスタープランから建物設計まで長年に亘って携わってこられた東京工科大学八王子キャンパスを岡本会長のご案内で訪問してきました。

東京工科大学は、1986年に八王子に開校しましたが、その前身は片柳鴻日本電子学院理事長が1953年に日本テレビ技術学校を設立し、1956年学校法人の認可を受け、校名を日本テレビ技術専門学校に改称、1958年東京都大田区蒲田に1号館校舎を創建、1964年に校名を日本電子工学院に改称し現在に至っています。創設者の片柳鴻・日本電子工学院理事長は、1920年生まれで今年98歳になられますが、学校には毎日のように顔を出され、また画家でもある片柳理事長の作品を展示する鴻稜美術館もキャンパスの中につくられています。

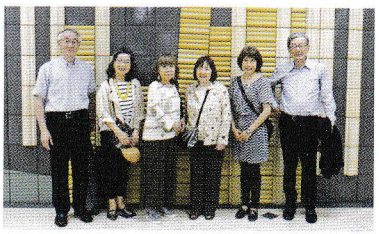
東京工科大学は、「理想的教育は理想的環境にあり」という理念の基、八王子市郊外の40ヘクタール近い広大な緑豊かな丘陵地に約12,000名の学生が集うキャンパスが展開しています。まずキャンパスに足を一歩踏み入れると日本では稀にみる規模の大きさに圧倒されます。そしてさらにキャンパスを歩いていく建物の内外にアートが溢れていることに驚かされます。文化勲章受章作家圓鍔勝三の《朝の調べ》を始め、村井良樹、圓鍔元規、筒井英造、日高頼子、工藤健、広井力などの素晴らしいブロンズ作品がピロティや学生広場に置かれ、建物の中を歩くと、片柳鴻画伯の作品約120点、片柳画伯の原画に基づいてつくられたステンドグラスや大きな陶壁画などが展示され、まるで美術館のようなキャンパスでした。

この後、蒲田校舎にも協会の会報、イベント案内を置かせていただき、今後も協力いただけることになりました。

（松本治子・飯田郷介）

川口市めぐりの森

東京工科大学八王子キャンパス



岡本賢会長作「Through the Forest of Intelligence」の前で

平成 30 年度　通常総会

●開催日	平成 30 年 6 月 7 日（木）　午後 5 時 45 分～	●会員総数	372 名　（個人会員 263 名・法人会員 109 名）
●場　所	建築会館大ホール	●総会成立定足数	189 名
●議　長	岡本　賢（会長）	●出席者	201 名
●議事録署名人	中村茂幸（会員）、堀田　誠（会員）		（出席 81 名、議決権行使書･委任状提出 120 名）
●司　会	立石博巳（会員・総務委員会副委員長）		

岡本 賢会長　挨拶

皆様 30 年度通常総会に多数お集まりいただき有難うございます。

本年度は当協会設立 30 周年に当たります。会員の皆様にはすでに様々な企画で活動して頂いている最中ですが、同時に芦原義信先生の生誕 100 年も重なっておりますので、芦原義信先生に関係する企画もこれから始まる予定でございます。　当年度はそういう事で非常に充実した年度になると同時に、大変忙しい年度になるという思いであります。

会員の皆様方には大変な時間と労力のご提供を戴かなくてはなりませが、いろいろご面倒をかける事になりますが、どうぞ宜しくお願いしたいと思います。

協賛金の募集も同時に行っておりますけれども、色々な企業のご支援、それから

会員の皆様のご好意により、おかげ様で目標の達成に近づきつつあるような状況で

ございます。皆様のご支援に心から御礼申しあげたいと思います。

30 周年という事になりますが、一つの節目になって参りますので、これからもこの協会が次の 40 周年・50 周年に向かって発展してゆく為にも、さらに協会の充実がなされなければなりませんが、そのためにはより広い分野の人びとに集まって頂いて、この協会は「空間総合芸術をより良い優れたものにする。」という目的の為にいろいろな事業活動を行っているのですが、もっと広い分野で多くの方たちに集まって頂いて、その広い分野の様々な立場でいろいろなご議論を頂いて、本当に魅力ある企画を実行していけるような協会になっていければ、よりよく社会的にも協会の存在がつよく認められていくのではないかという風に思っております。それがつぎの 10 年・20 年に繋がって行けるのではないかと思います。その為には多くの仲間・新しい仲間・新しい立場の方たちを、皆様方の関係の方たちからお誘い頂いて、この協会の会員をもっともっと増やして頂ければと念願しております。　今年も様々な企画がこれから行われますので、皆様方が忙しいなかお願いしなければなりませんが、是非楽しくこの協会の活動を進めて頂きたいと思います。今日は澄川先生にご登壇願って、芦原義信先生にまつわる思い出話とご講演をいただくことを楽しみにしております。　澄川先生宜しくお願いいたします。

審議

第一号議案　平成 29 年度事業報告に関する件は wo 東條専務理事より提案、第二号議案　平成 29 年度　貸借対照表、正味財産増減計算書、財産目録及び収支計算書に関する件は石田理事・事務局長より提案、森田監事より 29 年度事業及び監査報告があり、議長採決の結果、第一号・二号議案は原案通り満場一致にて承認可決された。

第三号議案　長期会費未納会員の取り扱いに関する件も議長より採決を諮ったところ、第三号議案は満場一致にて承認可決された。

以上をもって 30 年度通常総会の議事の審議は滞りなく終了した。

（事業報告･決算報告は､協会ホームページ　法人情報に記載）

報告

平成 30 年 3 月 27 日開催の、平成 29 年度第六回理事会において、会長より提案され決議された「平成 30 年度事業計画、同　収支予算書」について石田理事・事務局長より報告があった。

（事業計画･事業予算は､協会ホームページ　法人情報に記載）

30 周年記念講演

澄川喜一　協会名誉会員（彫刻家・日本芸術院会員）「私と芦原義信先生」

中島達哉　造園家（30 年度文化庁新進芸術家海外派遣制度に当会から推薦，米国　オレゴン州ポートランドに派遣決定）

交流懇親会

岡　副会長の乾杯発声により賑やかに交流・懇親が進んだ。

途中、新入会員の紹介、３周年記念事業の案内を挟み、副会長の中締めで終了、散会した。

以上

「平成 30 年度　通常総会」は６月７日に開催された

澄川喜一先生による記念講演が催された

造園家・中島達哉氏による講演

設立 30 周年記念事業実行委員会だより

実施予定記念事業（9 月～ 12 月）

街なかミュゼ作品　視察会	展覧会委員会	9 月（実施日・詳細未定）
景観シンポジウム 「ローカリティーを魅き出す　しつらえ」	進士五十八、宮城俊作、平賀達也 原田麻魚、鷲田めるろ、	10 月 1 日（月）日大 CST ホール
第 5 回　街に飛び出す作品展	展覧会委員会	10 月 18 ～ 25 日　建築会館ギャラリー他
第 170 回　aaca フォーラム　「ステンドグラス修復」	平山健雄	10 月（実施日未定）　サンゲツ品川 SR
会報 81 号（30 周年記念号）	広報委員会	10 月 31 日（水）　発刊
文化事業講演会　「これからの銀座を考える」(三回シリーズ)		
第一回　GINZA　SIX	谷口建築設計（研）＋鹿島建設（株）	10 月 24 日（水）　サンゲツ品川 SR
第二回　東急プラザ　銀座	（株）日建設計＋清水建設（株）	11 月 20 日（火）　〃
第三回　GINZA　PLACE	クライン ダ イサム アーキテクツ＋大成建設(株)	12 月 17 日（月）　〃
30 年度 AACA 賞　公開審査	AACA 賞選考委員会	11 月 11 日 (日)　建築会館大ホール
第 14 回　山梨・静岡地区建物視察会	会員交流委員会	11 月 9・10 日（金・土　詳細未定）
第 50 回　aaca 芦原義信記念杯	富士国際ゴルフ倶楽部	11 月（実施日・詳細未定）
情報文化座談会	内藤　廣、三谷　徹、坂上直哉	11 月 30 日（金）　東京藝大美術学部
30 周年特別設立記念会	日本建築美術工芸協会	12 月 12 日（水）　建築会館大ホール
30 周年記念式典・功労者記念表彰		
30 周年記念講演	芦原太郎	
30 年度 AACA 賞発表・表彰式		
30 周年記念誌発刊	30 周年記念事業実行委員会	

事務局だより

■新入会員　2018年4月～2018年6月(敬称略)

2016 年 9 月　個人情報保護法の改正が成立した事を受け、個人は氏名のみ、法人は会社名・代表者又は担当者を掲載致します。

《新入会員》

個人会員	丸山十志郎(書道家)、永池雅人(建築家)、深尾雅子(美術家)、 吉田　誠(建築写真家)、岡本明久(日本画家)、 中嶋クミ(イラストレーター)、鍜治加緒里(イベント企画)、 重岡公二(ケイエスシステム研究所)、 広谷純弘(アーキヴィジョン広谷アトリエ)		
法人会員	コクヨ株式会社	ファニチャー事業本部 開発営業本部長 早川嘉洋	〒 108-8459 港区港南 1-2-70 品川シーズンテラス 18 階 TEL.03-6635-3138

編集後記

会報は、今年協会が設立 30 周年という記念の年に 80 号という節目を迎えましたが、これもひとえに長年に亘る諸先輩方のご努力の賜物と感謝しております。これを記念して岡本賢会長に会報のこれからについてお話しを伺いました。多くの貴重なご意見をいただきましたので今後の会報の編集に活かしてまいります。また初代の広報委員として会報の編集に携わられた高部多恵子会員からは、芦原義信初代会長のお話しなど懐かしいお話を伺うことができました。次号でも長年協会の活動に携わってこられた方々からお話しを伺う予定です。

協会の設立に尽力された芦原義信先生は、今年生誕 100 年を迎えられました。（大正 7 年 7 月 7 日生）協会では生誕 100 年を冠した様々な事業が行われますが、会報でも生誕 100 年を記念して、80 号から 83 号（予定）まで芦原義信先生の作品を表紙でご紹介していきます。80 号でご紹介した駒沢公園体育館は、東京オリンピック開催時はレスリング会場として熱戦が繰り広げられましたが、この 6 月にはレスリングの全日本選抜選手権が開催され、今話題の女子レスリングではドラマティックな決勝戦も展開された舞台となりました。また東京オリンピック開催当時の写真や貴重な資料が常設展示されており、2020 年の東京オリンピックに向け話題のスポットになるかもしれません。この駒沢公園体育館と隣接するオリンピック記念塔（管制塔）は、今でも時代を感じさせない美しい名作ですので会員の皆様も今年は是非、芦原義信先生の作品見学にお出かけください。

なお、前 79 号において、一部ご執筆者の方にご迷惑をおかけしたことをお詫びいたします。

aaca 2018.7 no.80

発行人　会長 岡本 賢
発行　一般社団法人 日本建築美術工芸協会
〒 108-0014
東京都港区芝 5-26-20　建築会館 6 階
TEL　03-3457-7998　FAX　03-3457-1598
URL　http：//www.aacajp.com
E-Mail　info@aacajp.com

編集　広報委員会
委員長　飯田郷介
会報担当副委員長　野口真理
会報編集委員　五十嵐通代　石田眞人　竹生田 正　田島一宏　中村弘子　松本治子　三上紀子　山崎和子　山崎輝子　山下治子　吉田 誠

編集制作協力　株式会社 アム・プロモーション